

原敬の書(2)

——書作品について——

玉澤 友基

一 はじめに

原敬の書については、本誌第二号で主として書簡について取り上げ、書表現としての特徴と卓越性について述べた。しかしその後、管見の範囲では原の書に対する書の専門家の論評は見当たらない。骨董の世界でも、同時代の人々と比べてそれ程高価ではなく、評価は決して高いとは言えない。

原の筆跡は書簡を始め、日記やメモ類、原稿、句帖、書作品等夥しい数にのぼる。しかし、書作品で通常実見できるものは原敬記念館等で数点に限られる。出版物でも没後間もなく刊行されたものに掲載されているものが多く、近年は目にすることは少ない。全貌はなかなか把握しがたい。

筆者も何度か実見したが、贋作が多く、作品の所有者の中には贋作を真筆と信じ込んでいる場合も見られ、その書について十分な理解には到っていないのが現状のようである。

本稿では、過去の出版物等に図版が掲載されているものを中心

にリストアップして整理を行った。その結果、八十一点を確認した。さらに、原敬の書作品の製作年代、書としての特徴について考察し、また、原敬記念館所蔵の作品を中心に八点を取り上げ分析を行い、書作品として優れていることを述べた。

二 原敬の書作品の種類及び数

原の書作品は、条幅・扁額・短冊・色紙・扇面等様々な形式がある。生涯でどれくらいの数を書いたのか記録はない。作品の所有者が全国に散在する現状では、原の残した作品全てを把握することは殆ど不可能である。

原奎一郎〔一〕によると、

そこは父のことだから、書き出すと、手習いはするし、今まで頼まれても書かなかった相手を思い出して、書いてあげようというようなこともやった。相手はもう忘れた自分なので、二重によるこんだりしたものである。たとえば親戚などでも、はじめはだれひとり父の書など持っていなかったが、書きは

じめてからは、これはだれに、これはかれにというふうには、まんべんなく恨みつこなしに書いてあたえた。(一八〇頁)

この通りとすると、相当数の作品がありそうだが、どの位にのぼるのかは不明である。前述のように作品を現認することも困難な現況で、原の残した書作品を把握する方法として、これまでの出版物に掲載された作品により表に整理してみた(資料「原敬の書作品一覽」)。その結果、出版物の掲載作品にはかなりの重複があるが、現時点では八十一点が確認できる作品である。これらによつて、原の書風の概要は把握できると思う。表では記年のあるものを初めに記載し、ついで漢字作品、俳句・和歌を書いた漢字仮名交じり書の順に整理した。記年の作品は全体の約四分の一の二十四点に留まる。

これらの作品は、現存するかどうかは不明であるが、図版を見る限りでは、原の書の特徴がしっかり出ており贋作はないと思う。資料の主などころでは、没後間もない大正十一年に刊行された『原敬全傳』には二十一点、昭和四年刊行の『原敬全集』には二十六点が掲載されている。また、大正十一年の『原敬翁遺墨目録』は原の作品の複製頒布のカタログであるが二十九点を掲載している。これには目次の後に「以上美術光筆印刷法に依り完全實大に複製したるものにして原本と對照し寸毫の差なし」との表記がある。複製によつては縮小拡大をしたり、落款の位置等を改変して、作者の表現意図を損ねているのを見かけるが、ここではこの表記を信用し資料として扱うことにした。さらに比較的新しいが、『写真集原敬歿後五十年その生涯』(昭和四十五年)には五点、『図録宝裕館コレクション』(昭和五十八年)には四点が掲載されている。その他、原敬記念館企画展資料に掲載されたものがある。

三 原敬の書作品の制作年代

原の書作品の制作年代の関しては、前掲『普段着の原敬』に紹介があり、自身、日記の明治四十二年五月二十九日に次のような記述がある。

長谷場の官邸に催せし小集に赴きたるに七八名来客者あり、雑談中伊藤大八の話を、此間書畫の入札あり、余の書なりと云うものあり、入札の結果五圓にて落札し、人々余の書は珍らしきものなりと云ひ居たるも其筆跡は余の筆跡に似ざりしと云ふに付、落款ありしやと尋ねたるに唐紙半切に詩を書したるものにて只だ敬の一字のみ、但し印は之ありたりと、然るに余は印も固より之あるに非らず又書とて絶対に之なし、余の記憶中一昨年の大演習の際、結城にて旅館なりし處にて主人の強請して已まざるに因り已むを得ず横モノに数字を書して與へたることもあるも其已外に之なし、全く余の偽筆を作り印まで偽造せしものと思ふ、世間の書畫骨董必らず此類多し、笑ふに耐へたる次第なり。

〔原敬日記〕第二卷、三五六頁

この記述の「一昨年の大演習」は明治四十年十一月十四日〜二十日であり、この時、結城の旅館で、横物に数字揮毫したのが、原の書作品制作の始まりという。

原奎一郎(一)には、「揮毫ざらい」と題して原の書作の様子が記載され、揮毫の類を嫌つたと述べ、

そのうちハッキリ決定的に、書かざるを得なくなり、いやでも応でも書いてあげなくてはならないような事態になったのは、政友会総裁に推されてからのことである。こうなると、総裁の書は、家の子郎党へのいわばお墨付き的役割もすることになるから、どうしても書かないわけにはいかななくなつて

書いた。だから父の書は世に少ないが、それでもそちこちに
見かける真筆はみなこの時代（政友会総裁就任以後のもの）
である。（一七九頁）

という。政友会総裁就任は大正三年六月十八日である。原の書
の殆どが政友会総裁就任以後ということは、大正十年暗殺までの
七年間、五十八歳から六十五歳の間ということになる。

また、前田蓮山〔一〕も、

誰かに書いたと云ふことが知れると、おれにもおれにも責
められるからね……彼には書いたが此れには書かないと云
つてはわるいから一切筆を持たぬことにして居るんだ。……
私が光筆版の精功なことを話したら、先生無邪気に目を丸く
して『それは珍らしい。我輩には其れで澤山だ。目で見て面
白ければ目的は達するわけだからね。早速見に行かう……』と
大光社の所在を詳しく聞かれた。（前書き）

と揮毫を嫌った原の様子を紹介し、複製制作に到った経緯を記
している。

日記の記述と併せて整理すると、原の書作品の制作年代は、明
治四十年から大正十年まで、十五年間であり、殆どは大正三年以
後、ということになる。資料「原敬の書作品一覽」を見ると、記
年の作品は多くないが、記年のあるものは大正年間に集中してお
り、原奎一郎、前田蓮山の記述とはほぼ符合する。

また、句作を始めた時期について、大正二年頃であると言われ
ている【一】。句作と書作の時期がほぼ同じ時期に始められたと
言えよう。

さらに、興味深いのは贋作で、原奎一郎〔一〕は

ときに美術商とか骨董屋とかいう人が見えて、父の書なるも
のを持つてくるが、真偽は一見してわかるどころか、じつは
一度も本物に出会ったことがないのはどういいうわけだろう

か。明治四十二年ごろからすでに偽筆が流布しているとい
うことは、父の書にも市場価値があったということの意味する
のであろう。（一八〇頁）

と言う。現在でも、骨董界に出入っている原の作品と称される
ものの中には贋作がかなり多く、筆者もしばしば眼にする。

四 原敬の書作品の特徴について

原の書作品の特徴を幾つか挙げよう。

一つは、力強くスケールが大きくて品格が高いことである。作
品を前にしていると心が洗われるような清々しい気分させられ
る。贋作にはこのようなことは決してない。力強さは特に一文字
目の初画に顕著で、含墨豊かで太く書き出すことが多い。また、
意表について最終画にも現れる場合がある。しかし、それでいて
粗野でない。

二つ目は古書法を学び、自家葉籠中のものにしていくことであ
る。

揺るぎのない書の骨格、爽やかな品格は、自己流の癖字ではな
く、古書法を習ったことが彼の書からは想像できる。筆者は実見
していないが、原が手習いに使用した『淳化閣帖』が伝存する
という。原の書には、十七帖あたりの王羲之の書と共通する文字の
頭部を大きく書く特徴がある。

書簡の場合は草卒の間に書かれたりしたものもあるせいか、文
字の崩しが乱れることもあるが、書作品の文字の崩し方は非常に
しっかりしている。

三つ目は、技法が多彩である。字形や筆遣いに関しては変化が
ありながらそれが上手く調和している。例えば始筆一つをとって
見ても、同一の入筆をしない。文字毎の変化がある。この点も多

くの贋作にはない点である。

四つ目は、余白に対する配慮が行き届いている。概して文字の外に広い余白を取るが、その余白が生きていて無駄な空間がない。五つ目は、落款の署名と用印には細心の注意を払っている。書かれた詩文の本文と同様に落款にも注意してみる必要がある。漢字作品の引首印には「全吾眞」「自反而縮」「雖千萬人吾往」「冷淡生涯」などを使用している。落款印には「原敬」「原敬之印」「逸山」を用い、漢字仮名交じりの俳句・和歌等の作品には「一山」「介壽莊主人」「一山百文」「東夷迂人」等を使用している【2】。印はいずれも格調高いが、刻者について筆者は確認していない。六つ目は、良質の用具用材を使用していることである。用紙は紙の肌合いから中国画仙紙と想像される。滲みや擦れが顕著に表現され、線質の深さが表現されている。印泥は中国製であろうか、鮮明で印影が明快に出ており良質である。

七つ目は、きちんとした様式を踏まえていることである。条幅、扁額から扇面等に到るまで様々な形式の書作品を書いているが、どれも書式・用印等まで様式をきちんと踏まえている。

これらのことから言えることは、原にとつて、書は余技であったかも知れないが、それなりの書の知識、教養、技量を兼ね備え、余技の域を越えたレベルにあったということが言えよう。

五 書作品の分析

先に優れた特徴を挙げたが、原も人間である以上、書き損じはあったはずであり、また今日我々が眼にする残された全ての作品が傑作でないことは言うまでもない。ここでは、原の書作品の中から、その特徴が現れている作品を取り上げ考察してみたい。

1 「處萬變主一敬 戊午新年 敬」(図1)

本紙寸法は、縦二二九cm、横三三二・五cmで今日の小画仙半切より少し小さいサイズである。「萬變に處するに一敬を主とす。」李迪(宋)。「戊午」は大正七年で首相になる年。筆者の経験から想像するに、何日か前に磨った墨が蒸発し濃くなったいたのである。中国画仙紙と思われる滲む用紙に、宿墨と思われる超濃墨で書かれ、墨量の多い文字の初画はどれも横から見ると光っている。墨は粘りが強く普通には書けない濃度であろう。しかし、粘りに負けないで気魄に満ちた運筆で書かれている。興が湧いて筆を執り、即興で一枚目か二枚目、墨を吟味する暇もなく一幅をしたためた、そんな印象を持つ。そのあたりは、後述する「功名富貴……」の作と比較すると違いが歴然とする。

頭部を強いタッチで入り、三面目以降は普通の無理をしない線の太さ。足元の左右の払いは清々しくしつかりと立つ。「萬」はこの作で唯一単純な草体にし、一幅の中で極めて効果的な変化をもたらしている。左下に抜き放つのは意表をつく。「敬」の最終画の太さ、長さ、抜き方も一見少しやり過ぎにも見えるが、これによって全体を平凡さから救っていると見るべきであろう。

落款もこの濃墨のせいで墨の伸びはよくないが、抵抗に負けずに渴筆のまま五文字を書き切っている。文字の連綿はなく、全て単体であるが、文字は背筋をピンと伸ばし、堂々たる構え。

本文は紙面中央より少し右よりで、一行書作品の定石通り。紙面の余白は「處」の上部より「敬」の下部を少し広くしこれも定石通り。文字の中心が通り、ピタリと決まっている。落款の位置は墨書と印の位置が紙面の中程に収まりバランスが良い。引首印の位置も「處」の右空間の良い位置である。

この作に関して特記しておくべきことは箱書きである。作品を

取めた桐箱上蓋には「原先生書 單幅」(図2)、内側には「芝峯池永石題」(図3)の墨書、「池永以志子」の白文印、「芝峯」の朱文印が押されている。池永については『普段着の原敬』に詳しいが、原の書道の師匠と伝えられる人物である。管見の範囲では、この箱書きは伝存唯一のもので、池永の数少ない筆跡での一つであり、雅印まで押された大変貴重なものである。原を主人と呼んでいた池永にとって「主一敬」の句の入ったこの作は、格別の思いを寄せたものであったかも知れない。

箱書きの書きぶりは、滑る板書きのせいか原の書に見られる速度感が乏しい。ゆつたりした、しかし、堂々たる構えの文字である。池永の箱書きの書きぶりと原のそれとはやや異なる印象を持つ。

原と池永の書の上での交流がいつから始まったのか、どのような交流であったのか不明である。また、書の師匠としての池永の影響はどのようなものであったのかについても、池永の書蹟資料があまりに乏しく、今その影響を明らかにすることはできない。

2 「功名富貴若長在 漢水亦應西北流 逸山敬」(図4・図5)

本紙寸法は一三二cm×三二・五cm。印は「冷淡生涯」「原敬」「逸山」。出典は、李白の「江上吟」。「名譽も富も長続きしない。それは漢水が逆流しないのと同じだ。」という意。引首印の「冷淡生涯」もこの句の意味内容と関連させての用印であろう。

この作は原敬記念館に複製があるが、前田蓮山の『原敬翁遺墨目録』のものとも異なる。太田孝太郎の評「流暢の筆にして弩張の態なく……」「3」がびつたり、書簡の書き振りと繋がる作というべきだろう。流れるような渴筆のなかに清々しい爽やかさを感じる。観るほどに清々しい品格に満たされるように感じるの

は筆者だけであろうか。贋作も何度か筆者は眼にした。過眼した贋作はこのように爽やかでない。

全体を通じて筆脈が貫通し、空間が精彩を放っている。行間の空け具合、字間の間の取り具合、文字の大小、字幅の広狭、墨量の変化、墨継ぎの位置、筆勢など自然に仕上がっている。

作品は、一字目「功」の第一画目の気魄に満ちた強い打ち込みで始まる。が、このやや強引とも見られる点画は、次第に解放されて、やや細身の軽快な動きとなる。「功」と「名」はやや間が空いた感はあるが、第二字目「名」以降は筆脈が貫通し、暢達し、変化に富んだ表現となる。「名」から「貴」まで実線で連綿はしていないが空間の筆意は貫通している。抑揚に満ちた「名」「富」。

「名」の前半は水平運動、後半は上下運動。「富」はその逆。「貴」は渴筆の水平運動。「富」と「貴」は共に右旋回の運動でありながら趣は異なる。小さな文字が続いた後、「若」の草体で含墨し大き目にする。「若」の大きさは全体の中で重要である。「長」「在」は微かに、「漢」「水」は太く連綿し、連綿でも変化をつけている。一行目は文字の大小の自然な変化がある。(図5)の落款の書きぶりも筆勢に溢れ清々しい。

3 「無私 戊午晩春 逸山々人」(図6)

出典は「老子」。引首印は「全吾真」、落款印は「原敬」「逸山」。この作品は、縦が二〇・三cm、横は三七・六cmと意外に小さい。小さいが大きく見える不思議な作品である。筆は「無」の第一画目の太さが限度のそれほど大きくはない筆であろう。大きくない筆を目一杯活躍させ書いている感がある。万毫の動きと、文字は小さいながら大きい印を使用することによって、かえって作品は大きく見える。今日の書道展でも小品の場合によくやられ

る方法である。

二文字と落款、印の紙面への収め方に無駄がない。全く遊びのない線で、筆面の強弱の変化、筆勢など見事という他ないと思う。シンプルでありながら潤いがあり精彩がある。

原の作品は初画を思い切り強く書き出すことが多いことは前述したが、強く入筆した「無」の第一画、それを受け、全体が緩みなく力強く運筆されている。「無」は頭部を大きく、左傾させ、縦長。典型的王羲之書法である。「私」は第二画目の縦画を左に凸にし、「無」の傾きと変化をつける。傍の「ム」の終筆を太く踏ん張り、この作を非凡なものにしている。

4 「介眉壽 逸山々人」(図7)

出典は詩経の「以介眉壽」から「眉壽を介く」。原の書の特徴である第一画目の太さ強さが際立つ。筆がよく活躍し、筆の軋みが聞えるようでもあり、大変厳しい線質で書かれた作品である。

5 「寶積 大正己未 春日 原敬謹書」(図8)

落款に「原敬謹書」「原敬書」と書いているのは管見の範囲では「寶積」のみである。「寶積」に対する並々ならぬ思いの表れと解すべきであろう。大正八年の作。筆の活躍は原の他の作品に比べるとさほど感じられないが、小品であるためか、書きにくい形式のためか、この言葉に対する思いであろうか、穏やかで慎重な書きぶりの作である。同文で落款の「春日」が「夏日」と書いたものが存在する。扇面の作は他に三点、「寶積」も他に三点確認した。

6 「甲寅夏嵐山にて 敬 夜に入りて水音冷し嵐山」(図9)

真筆であり、佳作であるが、印はない。表現としても原の特徴が出ている。文字の頭部を大きくし、詞書の書き出し「甲」や本文の書き出し「夜」は含墨豊かに始まる。

7 「真帆片帆往くか帰るか春の海 一山」(図10)

原にしては珍しく渴筆の短冊作品だが、筆致は原らしい。俳句なので、落款は「一山」、印は「一山百文」を押している。

8 「盛岡にて戊辰殉難者の五十年祭を営みける時 祭文を求められ余ハ戊辰戦争ハ政見の異同のみ誰か 朝廷に弓をひく者あらんやと云いてその冤を雪けり 焚く香の煙のみたれや秋の風 敬」(図11)

この作は三つの文字集団からなる。紙面全体の中での三集団と余白の調和具合が見事である。詞書の文字集団に比べ、本文をやや大きくし行の高さを変えている。本文書き出しは、ひときわ含墨多く強いタッチで書き出す原の独特の表現。落款は「敬」一字の草書。その下に方形印「一山百文」さらに下に円形印「介壽莊主人」を配置している。印の方形と円形の変化も効果的。原の作品は余白に対する優れた感覚が現れていると思うが、このような複雑な構成の場合はそれが際立つ。印は、俳句を揮毫した際に常用した「一山百文」「介壽莊主人」。

大正六年九月八日の日記に、旧南部藩士戊辰殉難者五十年祭を挙行し、祭文を寄せた旨の内容が記載されている。戊辰戦争の冤罪を雪ぐのが原の悲願であっただけに、この作の表現にも周到な構想と強い思いを感じる。

六 おわりに

原の書は下手であるとの評を耳にすることがある。整正な楷書を是とする観点からはそう見えるかも知れないが、筆者は、むしろ類稀な感性と卓越した技量を持ちながら、技量に溺れることなく、「書は人なり」の境地が現れた優れた書ではないかと思う。

書の評価は、目にした作品によるしかない。すなわち、優れた作品がいくら存在しても見なければ評価はできないわけで、原の作品が多くの人に触れ、正當に評価されることを願う。

掲載の図版資料は、原敬記念館の協力を頂いた。ここに記し謝意を表したい。

〔引用・参考文献〕

- 原奎一郎〔1〕…『普段着の原敬』、毎日新聞社、一九七一年
前田蓮山〔1〕…『原敬翁遺墨目録』、大光社、一九二二年
『原敬全傳』、鈴木利貞、日本評論社、一九二二年
『原敬全集』、田中辰志、朝風社、一九二九年
『原敬翁遺墨目録』、前田蓮山、大光社、一九二二年
『写真集原敬歿後五十年その生涯』原敬遺徳顕彰会、一九七〇年
『図録宝裕館コレクション』盛岡市中央公民館、一九八三年
『原敬記念館企画展資料』原敬記念館

〔注〕

- 〔1〕『原敬日記』第二卷、福村出版株式会社、一九六七年、六七頁
〔2〕『原敬の書作品一覽』のNo.五十一「御園に木やりの聲や五月

- 〔3〕『盛岡市史』文教編、盛岡市、一九六〇年、一九七頁
「晴」では例外的に「逸山」の印を使用している。

資料「原敬の書作品一覧」

「種類」欄の「交」は漢字仮名交じりの書

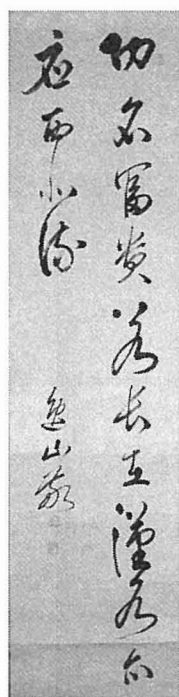
No.	種類	形式	本文	詞書き	落款	印	制作年	図書名	編著者	出版社	出版年	掲載頁	
1	仮名	縦	(音聞山の和歌下書)		内務大臣位勲臣敬 謹書		大正 2 (1913) ~	図録宝裕館コレクション	盛岡市中央公民館	盛岡市中央公民館	昭和 58 (1983)	50	
2	交	縦	はれ衣着て御幸拜むや秋日和	大正二年秋桃山行幸供奉の途上にて 敬		逸山 原敬	大正 2 (1913)	原敬全集下巻	田中辰志	朝風社	昭和 4 (1929)	444~445	
3	交	方形	はれ衣着て御幸拜む秋日和	大正二年十月桃山御陵御幸の途上 花押			大正 2 (1913)	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	8	
4	交	縦	年ことに召さるる人の数そふはさかまく御世のしるしなりけり	大正三年新年御宴に陪して 正三位 敬			大正 3 (1914)	原敬全集上巻	田中辰志	朝風社	昭和 4 (1929)	978~979	
5	交	扇面	悠紀主基のあかたためにこの朝けをろかみまつる卜庭の神	大正三年二月五日齋田卜定の御式に列りて 正三位 敬		逸山 原敬	大正 3 (1914)	原敬全集上巻	田中辰志	朝風社	昭和 4 (1929)	978~979	
6	交	縦	夜に入りて水音涼し嵐山	甲寅夏嵐山にて 敬		介壽莊主人	大正 3 (1914)	原敬全集下巻	田中辰志	朝風社	昭和 4 (1929)	636~637	
7	交	色紙	夜に入りて水音涼し嵐山	甲寅夏嵐山にて 敬			大正 3 (1914)	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	12	
8	交	色紙	夜に入りて水音涼し嵐山	大正三年夏嵐山にて 敬			大正 3 (1914)	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	12	
9	漢字	横	不孤		甲寅秋 敬	?	大正 3 (1914)	原敬研究資料(12)原敬日記を繕く第 10 回記念企画展	原敬記念館	原敬記念館	平成 4 (1992)	3	
10	漢字	横	断而行之		大正三年十一月 敬		大正 3 (1914)	原敬全集上巻	田中辰志	朝風社	昭和 4 (1929)	1074~1075	
11	漢字	縦	處萬變主一敬		戊午新年 敬	尔爲爾我爲我	原敬 逸山	大正 7 (1918)	原敬研究資料 30 原敬日記を繕く 第 26 回企画展	原敬記念館	原敬記念館	平成 13 (2001)	11
12	漢字	横	汲古		戊午初春 敬	自反而縮	原敬之印 逸山	大正 7 (1918)	原敬全集上巻	田中辰志	朝風社	昭和 4 (1929)	44~45
13	漢字	横	徳壽		戊午初春 敬	自反而縮	原敬之印 逸山	大正 7 (1918)	原敬全傳地	鈴木利貞	日本評論社	大正 11 (1922)	
14	漢字	横	謙受益		戊午初春 敬	?	原敬之印 逸山	大正 7 (1918)	原敬研究資料 19 原敬日記を繕く 第 16 回企画展	原敬記念館	原敬記念館	平成 8 (1996)	
15	漢字	横	無私		戊午晚春 逸山々人	全吾真	原敬 逸山	大正 7 (1918)	原敬全集上巻	田中辰志	朝風社	昭和 4 (1929)	182~183
							大正 7 (1918)	図録宝裕館コレクション	盛岡市中央公民館	盛岡市中央公民館	昭和 58 (1983)	50	
16	交	縦	朝風の茂りに聞くや槌の音	明治神宮立柱の御式に侍りて			大正 8 (1919)	原敬全傳天	鈴木利貞	日本評論社	大正 11 (1922)		

				敬						原敬全集 上巻	田中辰志	朝風社	昭和4 (1929)	286~ 287
17	漢字	横	淡然忘世榮		大正己未 春日 逸 山敬	雖千 萬人 吾往	原敬 之印	逸山	大正8 (1919)	原敬全集 下巻 原敬翁遺墨 目録	田中辰志 前田蓮山	朝風社 大光社	昭和4 (1929) 大正11 (1922)	316~ 317 10
18	漢字	扇面	寶積		大正己未 春日原敬 謹書	自反 而縮	原敬 之印	逸山	大正8 (1919)	(原敬記念 館)				
19	漢字	扇面	寶積		大正己未 夏日原敬 謹書	自反 而縮	原敬 之印	逸山	大正8 (1919)	原敬全集 上巻	田中辰志	朝風社	昭和4 (1929)	876~ 877
20	漢字	扇面	欲與天下共坐春 風		爲立憲政 友会創立 廿年紀念 書 原敬	自反 而縮	原敬 之印	逸山	大正8 (1919)	原敬全傳 天 原敬全集 上巻	鈴木利貞 田中辰志	日本評論 社 朝風社	大正11 (1922) 昭和4 (1929)	390~ 391
21	漢字	縦	秋色靜中生		逸山	?	原敬 之印	逸山	大正9 (1920)	原敬全傳 天	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
22	漢字	陶書	?平和來		敬				大正10 (1921)	原敬全傳 天	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
23	漢字	縦	一朶荷花滿院香		大正辛酉 元旦試筆 逸山敬				大正10 (1921)	原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正11 (1922)	4
24	漢字	横	松筠心		大正辛酉 元旦試筆 逸山敬	尔爲 爾我 爲我	原敬	逸山	大正10 (1921)	原敬墓所大 慈寺物語 原敬翁遺墨 目録	一戸英敏 前田蓮山	大慈寺 大光社	昭和61 (1987) 大正11 (1922)	173 9
25	漢字	横	寶積		原敬書	雖千 萬人 吾往	原敬 之印	逸山		原敬全集 下巻	田中辰志	朝風社	昭和4 (1929)	912~ 913
26	漢字	横	寶積		原敬謹書	全吾 真	原敬	逸山		写真集 原 敬 歿後 50年 そ の生涯	原敬遺徳 顕彰会	原敬遺徳 顕彰会	昭和45 (1970)	17
27	漢字	横	天地無私		逸山敬	雖千 萬人 吾往	原敬 之印	逸山		原敬全傳 天 原敬全集 下巻 写真集 原 敬 歿後 50年 そ の生涯	鈴木利貞 田中辰志	日本評論 社 朝風社	大正11 (1922) 昭和4 (1929)	540~ 541 122
28	漢字	横	淡如雲		逸山々々	雖千 萬人 吾往	原敬 之印	逸山		写真集 原 敬 歿後 50年 そ の生涯 原敬翁遺墨 目録	原敬遺徳 顕彰会 前田蓮山	原敬遺徳 顕彰会 大光社	昭和45 (1970) 大正11 (1922)	123 11
29	漢字	縦	精誠貫日普天下		原敬	?	原敬	逸山		図録宝裕館 コレクション	盛岡市中 央公民館	盛岡市中 央公民館	昭和58 (1983)	49
30	漢字	縦	滿院香		逸山敬	?	原敬	逸山		図録宝裕館 コレクション	盛岡市中 央公民館	盛岡市中 央公民館	昭和58 (1983)	49
31	漢字	横	古人情		逸山々々	全吾 真	原敬	逸山		原敬全集 上巻	田中辰志	朝風社	昭和4 (1929)	310~ 311
32	漢字	横	幽致		逸山々々	自反	原敬	逸山		原敬全集	田中辰志	朝風社	昭和4	42~43

字					而縮	之印		下巻			(1929)		
33	漢字	横	筆硯得佳友		逸山々人	雖千萬人吾往	原敬之印	逸山	原敬全集下巻	田中辰志	朝風社	昭和4(1929)	372~373
									原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	15
34	漢字	横	慎終如始		逸山敬	自反而縮	原敬之印	逸山	原敬全集下巻	田中辰志	朝風社	昭和4(1929)	372~373
35	漢字	横	香風咬		逸山敬	全吾真	原敬	逸山	原敬全集下巻	田中辰志	朝風社	昭和4(1929)	1072~1073
36	漢字	縦	功名富貴若長在漢水亦應西北流		逸山敬	冷淡生涯	原敬	逸山	(個人藏)				
37	漢字	縦	功名富貴若長在漢水亦應西北流		逸山敬	冷淡生涯	原敬	逸山	(個人藏)				
38	漢字	縦	功名富貴若長在漢水亦應西北流		逸山	雖千萬人吾往	原敬之印	逸山	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	5
39	漢字	横	拙		逸山	尔爲爾我爲我	原敬		原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	14
40	漢字	横	清風入梧竹			雖千萬人吾往	原敬之印	逸山	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	28
41	漢字	横	天地一家春		逸山敬	?	原敬	逸山	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	29
42	漢字	横	思入玄		逸山々人	雖千萬人吾往	原敬之印	逸山	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	27
43	漢字	縦	流水桃花物外春		敬	?	原敬	逸山	原敬全集上巻	田中辰志	朝風社	昭和4(1929)	1138~1139
44	漢字	横	介眉壽		逸山々人	?	原敬	逸山	原敬研究資料(31)原敬日記を繙く第27企画展	原敬記念館	原敬記念館	平成13(2001)	
45	漢字	横	雅静		逸山々人	雖千萬人吾往	原敬之印	逸山	原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	19
46	漢字	横	介寿荘			全吾真	原敬	逸山	(原敬記念館藏)				
47	漢字	縦	壽歴太平春		祝横山翁百歳壽敬				原敬翁遺墨目録	前田蓮山	大光社	大正11(1922)	26
48	漢字		浮雲柳絮人間世流水桃花物外春		爲・大慈禪寺 敬	?	原敬之印	逸山	原敬全傳天	鈴木利貞	日本評論社	大正11(1922)	
									原敬全集下巻	田中辰志	朝風社	昭和4(1929)	1018~1019
49	交	横	帰りに来て又緑蔭に俳書かな		一山				原敬全傳天	鈴木利貞	日本評論社	大正11(1922)	
									原敬全集下巻	田中辰志	朝風社	昭和4(1929)	830~831
50	交	横	喰ひ過ぎて腹な痛めぞ芋の秋	青木翁七十の際一山			介壽荘主人		原敬全傳天	鈴木利貞	日本評論社	大正11(1922)	
51	交	縦	御園に木やりの聲や五月晴	明治神宮上棟の御式に 敬			逸山		原敬全傳地	鈴木利貞	日本評論社	大正11(1922)	
									原敬全集上巻	田中辰志	朝風社	昭和4(1929)	476~477

52	交	縦	わびすけと聞くと 可憐の花咲て			一山 百文	介壽 莊主人		原敬全集 上巻	田中辰志	朝風社	昭和4 (1929)	808~ 809
53	交	縦	初秋や死損ひし 蟬の聲	亡友八角介石の 法事に侍りて 敬			介壽 莊主人		原敬全集 上巻	田中辰志	朝風社	昭和4 (1929)	808~ 809
54	交	縦	駿河路ハ茶の花 咲て冬枯る、		一山		一山 百文	介壽 莊主人	原敬全集 上巻	田中辰志	朝風社	昭和4 (1929)	1138~ 1139
55	交	縦	春雨に鳥のぬ る、帆桁かな		一山		一山 百文	介壽 莊主人	原敬全傳 天	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
56	交	縦	真帆片帆往くか 帰るか春の海		一山		一山 百文	介壽 莊主人	原敬全傳 天 原敬全集 下巻	鈴木利貞 田中辰志	日本評論 社 朝風社	大正11 (1922) 昭和4 (1929)	1018~ 1019
57	交	縦	春雨や音ゆるや かにくる、鐘				逸山		原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
58	交	縦	春雨や音ゆるや かにくる、鐘		一山		逸山		原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正11 (1922)	23
59	交	縦	大雨に色一とし ほや夏木立	平和成立祝賀園 遊會の折 一山			一山 百文		原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
60	交	縦	木瓜咲くや客な き庵の片隅に	腰越にて 一山			一山 百文		原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
61	交	縦	上げ潮の波音す るや春の宵		一山		一山 百文		原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
62	交	横	蠅いとふ身を故 郷に畫瘵哉				逸山		原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
63	交	縦	瘵姿に日のさし 込むや春の朝		一山		彦山 百文		原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
64	交	縦	枯れ残る菊一輪 や霜の朝		一山		東夷 迂人	介壽 莊主人	原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
65	交	短冊	枯れ残る菊一輪 や霜の朝						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正11 (1922)	6
66	交	縦	枯れ残る菊一輪 や霜の朝		一山		逸山		原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正11 (1922)	13
67	交	横	せめてもの心つ くしや蓬餅	腰越別荘にて家 人等蓬餅つき客 にも饗し東京留 守居の者にも送 りなとせしかば 一山				介壽 莊主人	原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
68	交	横	淋しげに老鶯啼 くや九十九折	琴平より池田に 往く途中海拔三 千尺と称する猪 鼻峠の頂上にて 一山				介壽 莊主人	原敬全傳 地	鈴木利貞	日本評論 社	大正11 (1922)	
69	交	横	遠近ニむらがる 鷺と見しものハ 磯邊ニあさる海 士にぞありける	餘ハ詩も歌も作 らず只一首去廿 五年公用にて朝 鮮ニ赴きたる時 よめる和歌あり 敬					原敬研究資 料(14)原敬 日記を播く	原敬記念 館	原敬記念 館	平成5 (1993)	
70	交	横	遠近ニむらがる 鷺と見しものハ 磯邊ニあさる海 士にぞありける	餘ハ詩も歌も作 らず只一首去廿 五年公用にて朝 鮮ニ赴きたる時				介壽 莊主人	原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正11 (1922)	18

			よめる和歌あり 敬										
71	交	横	焚く香の煙のみ だれや秋の風	盛岡にて戊辰殉 難者の五十年祭 を営みける時 祭文を求められ 余ハ戊辰戦争ハ 政見の異同のみ 誰か朝廷に弓を ひく者あらんや と云いてその冤 を雪けり	敬		一山 百文	介壽 莊主 人		(原敬記念 館蔵)			
72	交	色紙	行春を追ふて帰 るや草の庵						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	1
73	交	短冊	色々の音に聞え けり除夜の鐘 除夜の鐘他力の 主人戻りけり						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	1
74	交	短冊	花の香もはやう せにけり夏木立 なるを知るべに 鶯のなく						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	1
75	交	短冊	色々の音に聞え けり除夜の鐘						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	7
76	交	縦	小春日の障子な らして蠅去りぬ		一山		逸山		原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	16
77	交	色紙	秋ばれに御鈴の 音やいやたかし						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	20
78	交	短冊	小春日の障子な らして蠅去りぬ 錦木の庭にはこ れる小春かな						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	21
79	交	色紙	うつつ目はいつ こなるらん武夫 の姿は見えず音 聞の山	愛知縣大演習の 折音聞山にて					原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	22
80	交	縦	戻り来る天方節 や夏の月		一山		逸山		原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	24
81	交	短冊	鹿の音ハ聞かね と秋は知られけ り庭の千草に露 をふくみて						原敬翁遺墨 目録	前田蓮山	大光社	大正 11 (1922)	25



(图4)



(图3)



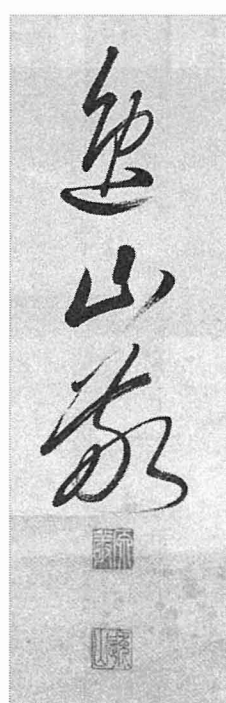
(图2)



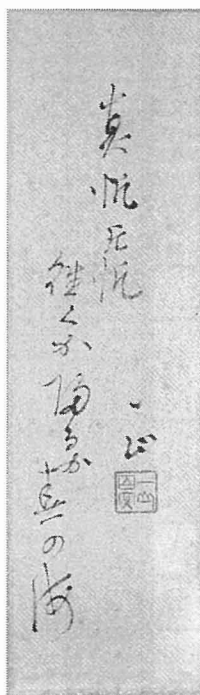
(图1)



(图6)



(图5)



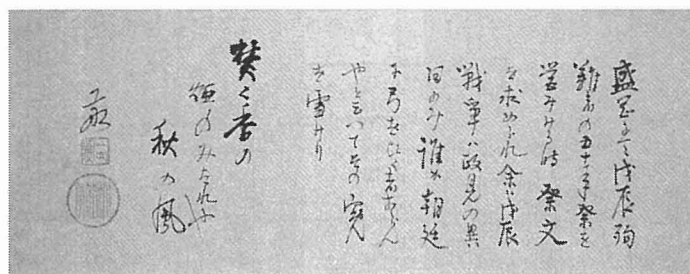
(図 10)



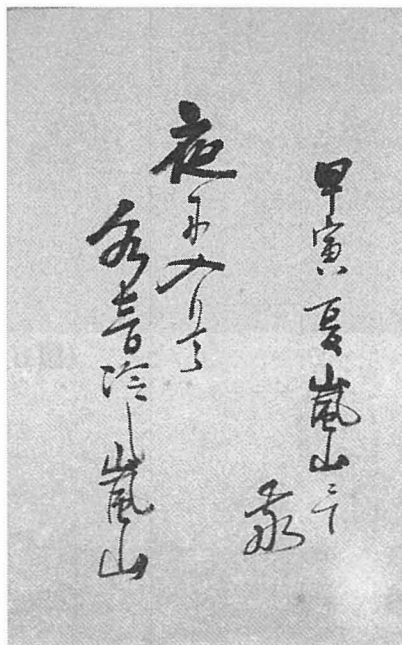
(図 7)



(図 8)



(図 11)



(図 9)